

川端康成と「以文会友」 ― 島根県中学校の同窓学生会願書について ―

宮崎尚子

Yasunari Kawabata and "Ibunkaiyu" - Petotopn for establishment of alumni student association of Shimane Junior High School-

Naoko Miyazaki

一 川端康成の境遇

はじめに

川端康成は美術品の蒐集家として知られる。池大雅と与謝蕪村の「十便十宜図」（一七七一年作、一九五一年六月九日国宝指定）や与謝蕪村の「紙本淡彩十宜図」（一七七一年作、一九五一年六月九日国宝指定）、浦上玉堂の「凍雲飾雪図」（十九世紀初めの作、一九六五年五月二十九日国宝指定）などの国宝を三点所有していたことも有名である。これらのコレクションは度々、全国各地で展示会が行われるほどの所蔵量である。その美術品の中には書もある。書に対する造詣も深く、自身も揮毫する機会が多くあった。好んで揮毫した文字の一つが「以文会友」だった。その中でも今回は大阪府立茨木高等学校にある文学碑「以文会友」と川端文学の関係について考察する。

川端康成は明治三十二年六月十四日、大阪の此花町に生まれた。医師であった父の栄吉（明治二年一月十三日生）は三十歳で、母のゲン（元治元年七月二十七日生）は三十四歳で、姉の芳子は四歳であった。ゲンは素封家であった黒田家（豊里村）の次女であった。川端家と黒田家は長く姻戚関係を結んでおり、栄吉の父である三八郎（天保十二年四月十日生）の代も黒田家から妻を迎えている。三八郎は川端康成の「十六歳の日記」に出て来る祖父として知られており、妻のカネ（天保十年十月十日生）とともに川端康成を「真綿にくるむやう」に溺愛したことも知られている。実はこのカネは後妻であり、先妻はカネの姉の孝であった。この孝とカネとともに黒田家の出であり、康成の母であるゲンは姪に当たる。孝の息子が恒太郎（「常太郎」の表記もある。安政五年七月五日生）で、カネの息子が栄吉で、ともにゲンとはいとこ同士の関係になる。最初、ゲンは分家をして従兄の恒太郎を婿養子にしている（明治二十二年十月十日）。庄屋などを務めた人徳のある人物だったようだが、子供を残さないで亡くなっている。ゲンはその後、川端家の当主となっていた義弟であり従弟でもある栄吉と再婚する（「廃家ノ上入籍」明治三十一年七月九日）。この夫婦の間に生まれた長女が芳子（明治二十八年八月十七日生）で、長男が康成である。芳子と康成は生まれながらにして、孝と恒太郎親子の死がなけ

れば誕生しなかったという事情を抱えている。また、芳子の誕生後に栄吉とゲンが入籍しており、戸籍には「黒田ゲン私生子」「即日生母ト正婚ニ依リ嫡出トナル」とあり、後の川端に衝撃を与えた。父の栄吉は、開業の苦勞からか体が弱り結核に罹患してしまう。看病していたゲンも感染したので芳子と康成は黒田家に預けられる。その後栄吉とゲンが立て続けに亡くなり、孤児となった姉弟はそれぞれ別々に引き取られた。芳子はゲンの妹タニの婚家である秋岡家（鯉江村）に預けられるが、十四歳になる前に亡くなってしまふ。康成は祖父の三八郎と祖母のカネの住む宿久庄に引き取られたが、祖母カネも亡くなってしまふ。直系の親族は祖父だけになり、その祖父が中学校三年生の時に亡くなる。所謂天涯孤独になった頃を書いたのが「十六歳の日記」である。

川端康成は明治四十五年に大阪府立茨木中学校に入学している。「十六歳の日記」には「学校は楽園である」として登場する。この頃の茨木中学校は、当時の中学校としては珍しく、全生徒に毎日「生徒日誌」を書かせる指導をしている。茨木中学校の生徒たちの詳細な記録の一部が今に伝わっている。その頃の川端康成の日記の一部は川端康成全集で確認できるが、特筆すべきは大宅壮一の日記である。彼は生涯のうちに残した日誌はこの茨木中学校時代の日誌だけだったという。「青春日記」として一般に公開されているが、康成と同じ話題が取り上げられていることもある。当時の茨木中学生たちは切磋琢磨しながらよりよい文章を書くことを目指していた。康成も中学二年生の頃からアジア人で初の受賞となったラビンドラナート・タゴール⁽¹⁾の影響で、ノーベル文学賞を目指して努力を重ねていた。中学三年生の時には祖父の病状が悪化しているが、百枚書いたら祖父が助かるという願掛けのような動機で「十六歳の日記」を書き始めたとしている。

その願いも空しく祖父が亡くなったので、しばらく黒田家や秋岡家の世話になる。しかしどちらの家も茨木中学校に通うには遠すぎたので寄宿舎に入ることになる。この寄宿舎での縁が、後の作家川端康成の誕生と関わることになる。

茨木中学校の寄宿舎は、教員が舎監として入ることがあった。つまり学校でも寄宿舎でも顔を突き合わせるのである。康成は茨木中学校の教員の中でも取り分け倉崎仁一郎という英語教師を信奉していた。日記にも数多く登場し、親のように慕っていたのが分かる。五年間を通して徐々に成績が低下しているのだが、英語の成績だけは五年間常に上位を保っている。東京帝国大学に入学したのは英文学科であったが、教員との関係から国文学科に転科してから卒業している。こういった点からも倉崎仁一郎の影響の大きさを指摘できる。この倉崎仁一郎は文学に対する造詣が深いことでも、地元の新聞記者にまで知られており、康成たちを魅了していたようだ。ところが、いよいよ卒業という一か月前に、この倉崎仁一郎が脳溢血で急逝する。悲しみに暮れた生徒たちは学年会の中で、先生の棺を自分たちで担ぐことを決めた。総勢八十八人の生徒たちに交替で担がれた倉崎仁一郎の棺は、茨木町の人たちが見守る中見送られた。当時、遠方にまでこの美談は知れ渡ったようで、翌年入学した同窓生の証言が残っている。

倉崎仁一郎の葬式は生徒たちに印象深かったようで、学年を越えてその日誌に残されている。全部で十名の日誌が抜粋され、「故倉崎仁一郎先生追悼号」（大正七年）に掲載された。川端康成の日誌は別の舎監で国語教員であった満井成吉を介して石丸梧平に託された。石丸梧平は茨木中学校に在籍したことがあり、その時に満井成吉と親交を結んでいる。当時は大阪で「団欒」という家庭文芸雑誌を主宰しており、その雑誌に無名の中学生の文章を掲載した。川端康成は作家を志して

いた半面、作文の成績が芳しくなかった。「文章は拔群だが内容が女々しい」という評価が関係していたのか低迷していた。それを突破したのがこの生徒葬の美談だった。琴線に触れる文章に目覚めたのもこの生徒葬が関係している。

この時の日記は「生徒の肩に柩をのせて」「団欒」大正六年三月）として雑誌掲載され、作家として活躍し始めた時に「倉木先生の葬式」（キング）昭和二年三月）として世に出した。その後、同じ内容で戦後に「師の棺を肩に」（東光少年）昭和二十四年六月）を出している。この生徒葬という出来事の延長線上に茨木中学校の「以文会友」があったことを考察する。

二 生徒葬の美談

大正六年一月二十九日未明に、茨木中学校の英語教師である倉崎仁一郎が脳溢血で急死した（二月一日は五十歳の誕生日であった）。翌朝茨木中学校は大騒ぎになる。川端康成は寄宿舎でこの報を受けたが、舎監で国語教師の満井成吉（茨木中学の同窓生）が狼狽している様子を「倉木先生の葬式」（キング）昭和二年三月）、「師の棺を肩に」（東光少年）昭和二十四年六月）と二つの小説にしている。この倉崎仁一郎は川端康成ら茨木中学十八回生達の担任で、卒業を目前にしているの急逝であった。加藤逢吉校長の片腕と言われ、風紀委員長も務めた人望熱い人物で、生徒たちからは親のように慕われていた。

授業どころではない五年生たちであったが、当時の体育教師であった杉本傳（近代水泳の父、茨木中学の同窓生）は、体育時間を学年級会の時間として提供した。八十八人の生徒たちは、「クラッさん（倉崎仁一郎の愛称）」の死を受けて自分たちにできることを話し合う。

遺族への寄付や墓のこと等多岐に及んだが、結局中学生の自分を考えて先生の棺を全員で担ぐことに決まった。この決定を受けて杉本傳は生徒葬が実現するよう、学校と同窓会に働きかけるのである。

最初の問題は葬儀場の確保であった。倉崎仁一郎は禪宗で、茨木での檀家寺であった本源寺（この時点で倉崎仁一郎は、十歳の次女、生後一ヶ月の次男、生後六か月の三男を立て続けに亡くしている）の本堂は手狭であった。倉崎仁一郎は島根県の松江中学校の出身だが、松江での檀家寺は桐岳寺という曹洞宗であった。本源寺は臨済宗妙心寺派である。当時の本源寺の本堂は小さかったことが古地図などでも確認できる。二年前行われた茨木中学校創立二十周年の式典では、百人近い卒業生たちが集まってきた。殆どが倉崎仁一郎の教え子である。このことから葬儀は多くの参列者が見込まれたので、相応の広さのある本堂が必要であった。この時、茨木中学校の近隣で、尚且つ倉崎仁一郎の住居に近かったのが真宗大谷派の茨木別院であった、当時の檀家総代が久敬会会員であったことから本山との間で交渉が行われた。結果として本山から特例として葬儀場として使用することが認められた。これも同窓会である久敬会の尽力がなければ実現しなかったことである。このことは川端も知っており、「倉木先生の葬式」では「葬儀は大きい真宗の本堂で行はれた。先生の家に宗旨に従って禪宗の儀式だったが、真宗寺の僧侶が特別の好意で式場を貸してくれたのだった。」と触れている。「特別の好意」というのが生徒葬には随所で見られる。

次の問題は棺の重さである。倉崎先生は身長が五尺四寸四分（約一六五センチ）で、体重が二十貫四百匁（七十六・五キロ）であった。これに関しては八十八人の生徒たちが提灯、旗、花輪、棺と役割分担をして解決した。特に棺は担ぎ手と控えが交替しながら倉崎家から別

院、別院から葬儀場へと担いだ。学年級会の夜は倉崎邸で近親者による通夜が行われた。翌三十一日の十五時に、自宅より出棺して、茨木別院まで運ぶ。久敬会の会員は六百人いたというが、このうち五百人が駆け付けたというから、倉崎仁一郎の人望の程が分かる。この「三町に渡る葬列」の様子は当時の茨木の人々の評判になったことが同窓会の記事などで確認できる。この葬列も葬儀場の問題と同じく、茨木中学校の生徒たちの協力で解決されている。

もう一つの問題が火葬場へ運ぶ日程であった。通常は通夜、葬儀の後に火葬場にて荼毘に付す流れになるが、倉崎仁一郎の場合はそうでない事情があった。親族が遠方について、葬儀に間に合わなかったからである。最後に一目合わせてから荼毘に付すということと考えたと、火葬場に運ぶのは葬儀の後ということになった。倉崎仁一郎の葬儀には後述する親族が出席予定であった。妻の寿恵は持病と風邪で臥せっており、葬儀への参列は見送った。長女のシヅは従兄の長谷川清治（後の撫順製油工場長）に嫁ぎ、この時は岩手の釜石にいた。この夫婦は遠方から遅れて到着した。長男の義郎は東京の通信学校から戻り、三女の道は東京の女子師範学校から戻り葬儀に参加した。四女の敏は尋常小学校一年生で、唯一倉崎仁一郎と同居していた子供であった。（この家族構成が後の「倉木先生の葬式」において「孤児のお嬢さん」のモチーフにつながる）松江から兄の倉崎金之助（松江中学校英語教師）が、東京から弟の倉崎清（陸軍少将）が到着した。彼らの為に葬儀と火葬の日が遅らせた。

二度目の通夜は五年生八十八人が残った。当初は翌日の授業に差し障りがあるので帰宅を促されるが、それぞれ重ね着をして戻ってきたという。寺の跡取り息子の藤波大超や本田正応等がいたので、彼らの読経に合わせて全員が合掌をしたという。翌朝の二月一日は長田（ちよ

うだ）の火葬場に向けて、突抜町、東外町を経由して棺を担いだ。生きていれば倉崎仁一郎の満五十歳の誕生日でもあった。この時には前述の兄、倉崎金之助とその娘理喜子が、長女シヅとその夫の長谷川清治がそれぞれ駆け付けた。生徒葬に対して兄の金之助は「教師冥利に尽きる」と涙を流して感謝をしている。荼毘に付されたのを確認した生徒たちは、それぞれ花輪の白い花を貰って、通常授業を受けるために茨木中学校に登校した。この前代未聞の葬儀も生徒たちの協力により無事に実現された。

その後、この出来事を生徒たちはそれぞれの「生徒日誌」に記した。出来の良いための十名の生徒の日誌が集められて、翌年の「故倉崎仁一郎先生追悼号」に掲載された。五年生が六名、下級生は一年生一名ずつ選出された（成績上位者、首席であった）。その中に川端康成の名前はない。この作文は成績上位者が選出されている。当時の川端の席次は三十五番で、意外なことに作文の成績は五十三点とほぼ最下位であった。ノーベル賞作家を目指しながら、評価されない苦しい時期にいた。文章は上手だが中身がないというのが教師たちの見解であった。ところが、生徒葬の印象を書いた日誌を、国語・漢文の教師であった満井成吉舎監に見出された。茨木中学校は絆の大切さを教育していた学校で、校歌に「書経」「易経」を引用して公に奉仕することや協力することの大切さを説いている。折しも日本初のプール（「水泳場」と呼ばれた池）を生徒たちの勤労奉仕で作成したばかりであった。このような一致団結する姿に感動する人々の様子、また生徒たちに減私奉公した倉崎仁一郎の姿を描いたことが評価されたようだ。満井成吉は旧友の石丸梧平にこの文章を送った。受け取った石丸梧平は多少添削してから無名の中学生であった川端康成の文章を自身の主宰する雑誌「団欒」に掲載した。与謝野晶子や斎藤茂吉等の著名人が名を連ね

る雑誌であった。葬儀の写真は巻頭に載せるという待遇であった。葬儀が実現したと同様に、雑誌が掲載されるまでには久敬会の人々の尽力があった。川端康成もこの件で、「感動する」テーマを書くことを会得したのである。一年後の日記には、作文は一高のクラスで一番の成績だったと書いているからである。川端康成は「団欒」に掲載された時の経緯を以下のように書いている。

倉崎先生は私が五年生の冬に急死された。教へ子の五年生が葬式萬端に奉仕した。校葬であつたらうが、生徒葬と言つてもよく、教へ子が柩をかついで寺へ行き、五年生全員が寺で通夜をし、焼場まで送つた。／私はその記事を書いて、當時石丸梧平氏が大阪で発行してゐた雑誌「団欒」に投稿した。石丸氏から感動したとの返書があり、「団欒」に大きく掲載された。確か「師の柩を肩に」といふ題も石丸氏がつけてくれたと思ふ。しかし三十枚ほどの長文がずるぶん削減されてゐた。(中略)私の書いたものが雑誌に出たはじめは、この「師の柩を肩に」であつた。(川端康成「独影自命」昭和二十四年九月)

この後も、度々川端康成は倉崎仁一郎のことを思い出して小説にしたり随筆に書いたりして度々文章化している。つまり川端康成として茨木中学校とは、倉崎仁一郎とその生徒葬と同義だったのである。中学校三年生の時を題材にした「十六歳の日記」を処女作と位置付けていることから分かるように、作家としての芽生えはこの茨木中学校時代だったと考えているのだ。

三 茨木高校の文学碑「以文会友」

川端康成の母校である大阪府立茨木中学校は、今の大阪府立茨木高

等学校である。同校の構内には川端康成の「以文会友」という揮毫をもとに作成された石碑がある。昭和四十三年にノーベル文学賞を受賞した記念に、久敬会(茨木中学校・茨木高等学校の同窓会)が昭和四十四年に建立したものである。久敬会の当時の会長と理事長が鎌倉の川端邸を訪問して揮毫を依頼している。昭和四十年十月二日に、同校の創立七十周年記念式典が体育館(茨木童子の角がモチーフの屋根)で挙行された。その時に記念講演として、卒業生である川端康成(中学校十八回生)と、大宅壮一(退学したが中学校二十一回生として入学)を招いている。この時に久敬会は記念として二人に色紙を書いてもらった。川端康成は「以文会友」を、大宅壮一は「男の顔は履歴書である」とそれぞれ書いて同校に寄贈した。昭和六十年にこの色紙は表具師により表装されて、同窓会館に展示されている。このことがあり、ノーベル賞受賞記念として「以文会友」の建立が企画された。この経緯からも同校の同窓会のつながりの強さを窺い知れる。

この時に対応したうちの一人が、当時の茨木高等学校の国語教員であった山脇謙吉であった。高校生に川端康成作品から推薦図書はないかを質問した際、川端康成は自分の作品は高校生には早すぎるので、夏目漱石を読むように答えたという。実はこのやりとりをした山脇謙吉は前述の満井成吉の次男である。満井成吉は山脇家に生まれたが、優秀だったことで中学校時代(茨木中学校在学中)に親戚の満井家に養子に行く。卒業と同時に宮脇家に養子に行き一女をもうける(この長女愛子は成吉の後に宮脇を継いだ芳三の妻になる)。妻の死後、満井姓に戻る。長男は夭折し、次男を自分の生家山脇家の養子に出す。この次男が件の謙吉である。成吉は、川端の日記の中では「山脇成吉」と書かれているが、川端康成の「生徒の肩に柩をのせて」を石丸梧平の「団欒」に紹介した満井成吉と同じ人物である。この時、山脇謙吉

は満井成吉の息子であつたことを名乗らなかつたという。恩人の息子と知らずに対談をしたということだ。因みにこの話は山脇謙吉の息子の山脇幹夫氏からの情報である。川端康成は、茨木中学校の縁で雑誌に初掲載された経緯がある。卒業してから文学碑を建立されるなど、同窓会との関りが強い人物であることを示す逸話である。

前述の倉崎仁一郎の葬儀は茨木中学校十八回生たちにとっては印象深いものだったようで、時折同窓会報で法要や遺族の話と共有している。昭和四十一年には倉崎仁一郎の五十回忌の法要が久敬会主催で行われている。川端康成は出席していないが香典を出している。大正六年の倉崎仁一郎の急死から、「生徒の肩に柩をのせて」（「団欒」大正六年三月）で注目され、「倉木先生の葬式」（「キング」昭和二年三月）ではかなり評判になったようだ。この時、久敬会及び加藤逢吉校長から依頼があり、昭和七年の久敬会会報に「師の柩を肩にした者」（久敬会会報昭和七年）という文章を寄せている。そして「師の柩を肩に」（「東光少年」昭和二十四年六月）を書いている。以上のことから「以文会友」の揮毫の際に中学校時代の生徒葬を思い出さない筈はないと言える。「以文会友」の文学碑の落成式の時の言葉が残っている。

碑文の「以文会友」―これは「論語」にある言葉でありまして、「文」は文学という狭い意味ではなく、まあ、文化一般、あるいは道徳・倫理、あるいは誠の心・美しい心・優しい心―そういうようなものによりまして「友」と会いまして、友人をつくつて、つまり人間が結ばれる。結ばれあうというような意味で、これは非常に広い色々な意味に解釈されると思うのであります。（川端康成「川端文学碑の除幕式での挨拶」音声 昭和四十四年十月二十六日 久敬会所蔵）

川端康成は茨木中学校で青春時代を過ごすことによって、作家にな

る夢に近づいた。茨木中学校時代、取り分け成績がよく楽しみにしていたのが倉崎仁一郎の英語の授業であつた。倉崎仁一郎は文学への造詣が深かつたことで有名だったようだ。川端康成のこれらの言葉には倉崎仁一郎の影響があつたと見てよい。久敬会が尽力して奇跡が起つたこともこの言葉の「結ばれあう」に当てはまる。まさに茨木中学校が推進していた人との絆である。

ところで「以文会友」は「論語」からの引用であるが、続きがある。「曾子曰、君子以文会友、以友輔仁」（「論語」顔淵第十二―二十四）であるが「曾子曰いわく、君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く」と読み、君子は学問によつて友達を集め、友だちによつて仁徳を達成する助けとするといったような意味に訳される。興味深いのは「以文会友」の後に続く「以友輔仁」である。「友によつて仁（仁先生）を輔く」と見立てた場合、八十八人の生徒達が倉崎仁一郎の柩を担ぐイメージと重なる。実はこの「以文会友」という言葉や考え方は倉崎仁一郎が教えた可能性が高いのだ。

四 倉崎仁一郎の同窓会発足の「願書」

倉崎仁一郎は慶応四年二月一日に松江の北堀町に生まれた。三歳年上の兄、倉崎金之助とともに松江中学校に入学する。二人とも優秀な生徒だったが経済的な理由で、他の同級生たちが進学する中、教員心得をしながら、教員の資格を取得している。兄の金之助は首席で、首席を競った相手は後の内閣総理大臣になる若槻禮次郎や岸清一であったから、その優秀さが桁違いであつたことが分かる。

松江中学校はかの小泉八雲がいた学校である。倉崎仁一郎とは時期がずれているが、西田千太郎²を介してのつながりがある。小泉八

雲が信頼した松江中学校の教頭であった西田千太郎は倉崎仁一郎の知己である。倉崎仁一郎が帰省する度に会食をしている様子が『西田千太郎日記』において確認される。小泉八雲の旧居も北堀町で、倉崎家と堀を挟んで向かいに位置している。この時代、同じ町内で英語ができる人間は限られている。交流があった可能性が高い上、親族によると倉崎家と小泉八雲とは交流があったと伝わっている。また、兄の倉崎金之助は日本で初めて小泉八雲の文章を教材として使用した英語教師である。同じように倉崎仁一郎は世界の文学に通じていて、それを授業中に話すことで生徒たちを魅了していたという。小泉八雲の文学観の影響を受けていたとしたら、その内容を生徒たちに話していた可能性も高い。

倉崎仁一郎の松江中学校の同窓で、伊原青々園⁽³⁾（本名は敏郎）という文筆家がいる。坪内逍遙と交流があったことから後に早稲田大学で書簡が保管されている。倉崎仁一郎から伊原青々園への書簡を見る限り、かなりの数の外国文学を日本語に翻訳している。伊原青々園は坪内逍遙とも親しかったので、一教師をしていた倉崎仁一郎は羨望のまなざしで見えていたようだ。反対に伊原青々園は子供がいなかったの、子沢山の倉崎仁一郎を羨んでいる。この伊原青々園との交流も松江中学校の出会いがもとになっている。

このように倉崎仁一郎自身が、松江中学校の同窓生との間で密度の濃い交流をしている。友のつながりや大切さを、身を以て知っている人物である。実はこの松江中学校（当時は「島根県中学校」）の同窓会創立に当たって、倉崎仁一郎が関わっていることが資料により分かったのだ。その際、件の「以文会友、以友輔仁」の引用をしている。以下、その願書を引用し、末尾に写真を添付した。（傍線は宮崎）

願書

多罪ヲ顧ミス敢テ願上奏度儀有之候、即チ今般同志ヲ糾合シ同窓学生会ナル者ヲ組織致度候ニ就キ御学校講堂ヲ会場ニ拝借支度事ニ御座候、然レ共方今奇怪ナル会世上ニ多ク有之候ヲ以テカ、ル会ト同視サル、ノ嫌ヲ防ガシ為ニ聊カ本会ノ旨趣ヲ陳述仕リ以テ閣下ノ寛大ナル御許ヲ仰キ奉候、

抑モ本会ヲ組織致候旨趣ハ生等修身学ノ教授ニ於テ嘗承リシ所ノ曾子所謂君子以文会友輔仁ノ格言ヲ遵守致セシモノニテ候、蓋シ学ヲ講シ以テ友ヲ会スレバ則道益々明ニ相成ベク善ヲ取リテ以テ仁ヲ輔クレバ則道徳日ニ進ム真理ニ候ヘバ、道明ニ德進マントノ事ヲ願フ吾々学生タル者ニ取テハ本会ニ誠ニ必須欠ク可カラザル緊要的ノ者ト自ラ信シ居候、生等熟々吾雲州学生ノ会ヲ見ルニ文ヲ以テ友ヲ会スル者ハ不尠候得共、共ヲ以テ仁ヲ輔クル者ハ寂々晨星ノ如クニ思ハレ候、殊ニ亦其講談討論スル所ノ者モ概ネ吾国体ニ政治ニ関シ或ハ適々學術ヲ以テ名スル者アレ共独リ政治メキタル者ノミニ限ルハ生等甚タ傍ヲ痛ク思フ所ニテ候、元来学識乏シク而シテ血氣未ダ定ラザル青年輩ノ政治ヲ論スル時ハ遂ニ其心荒蕪シ高遠ニ驚セ輕躁ニ走ル恐レアルモノニテ候ハ生等ノ深ク此ニ注意シ戒ニ戒ヲ加ヘテ本会ニ決シテ輕躁子弟ノ風潮ニ從ヒ、流俗ニ徇フ如キ拙策ヲ可取候、本会ノ主トスル所ハ生等中學生ニ適スル者ノミニシテ或ハ文学ニ於テ、理学ニ於テ英学ニ於テ漢学ニ於テ互ニ其思想ヲ吐露シ質義ヲ発シ講論スル規則ニ御座候ヘバコレヲ以テ同窓学生会ノ特徴トナシ、カノ奇怪ナル流行ノ会トハ充分区別シ得ベキ者ト自信仕候、

然レ共生等ノ旨趣ハ独リ之レ而已ニテ無御座候生等之更ニ大ニ欲スル所ノ者ハ、カノ格言ノ以友輔仁ノ意ニ有之候、生等自ラ反省スルハ人

ヲ推スニ吾中学生ハ卑屈ニ過ギ候カノ様ニ思ハレ候今本会会員ハ互ニ善ク導キ忠ニ告ケ以テ固有ノ弊風ヲ矯正シテ活発ノ氣象ヲ養成スル旨趣ニ御座候、然レ共所謂活発ノ氣象トハ寧ロ孟子所謂浩然ノ氣ヲ養フノ意ニテ候テ、貴重スベキ氣風ヲ養成スルト共ニ、本会ハカノ不遜ヲ以テ学生ノ殊有トシ、他人ヲ輕侮蔑視スルガ如キ惡徳ヲ艾除スル覚悟ニテ候、語ヲ替ヘテ言ハハ本会ハ学生ニ必要ナル徳義ヲ養成スル旨趣ニ御座候、殊ニ本会ハ吾中学校ニ教育ヲ受ケシ人ヲ限リテ会員タルヲ得セシムルトモ、或ハ素行修マラザル人アレバ本会ハ其入会謝絶シ、亦会員中徳義ヲ失ヒテ本会ノ面目ニ関スル者有之候節ハ、断然之ヲ驅逐シテ本会々員タルノ資格ヲ奪フ約ニ候ヘバ、又大ニ吾中学校生徒ノ品行上ニ結果アル督貴ナランカト信シ居候、

方今吾中学校ハ同窓ノ下ニ同教師ノ教ヲ蒙リ居候得共、其交誼友情ナル者甚ダ薄ク、秦人越人ヲ見ルガ如キ有様アルハ、生等ノ余リ感服セザル所ニテ候、又當時動モスレバ懇親会親睦会等ノ名ヲ仮リテ其實酒盃以テ樂ムノ者有之候ハ、生等ノ心得ザル点ニ候、今ヤ本会ノ如キハ酒ヲ待テ交ヲ結ブガ如キ拙策ヲ取ラザル可ク候、必ズ學問ト品行トヲ以テ交ヲ結ベハ誠ニ一挙兩得カト存候、如斯吾中学生團結シ文ヲ以テ道ヲ明ニシ善ヲ取リテ以テ仁ヲ進メハ、生等ノ修身教授ニ対スル素志ノ万一ヲ示スニ足ル可ク、且吾中学生ノ思想ト体面トヲ善美ニシ、人ニ対シテ愧ヂズ外以テ人ノ侮ヲ防クニ足ランカト生等ハ信居候、

如斯旨趣ニテ本会ヲ設立仕候間何卒微志ノ存スル所ノ者ヲ採用ニ相成、一週間一度ノ割合ヲ以テ講談討論之用ニ供セシガ為ニ、御校講堂ヲ放課後數時間拝借許可被成下度謹テ奏願上候。

最モ室内ノ器物什具等ハ存分注意シ毀損可不仕、モシマタ万一毀損仕ルガ如キ不都合有之候ハバ如何様共御指揮ニ從ヒ可申候、且御校御用ノ節ハ何時ニテモ退散可仕、万事從貴意可申間何卒願ノ筋御許可相成

謹テ奉願上候 以上

明治十九年五月十日

島根県中学校高等一年生

石倉鎮二郎 ㊦

倉崎仁一郎 ㊦

山本倉二郎 ㊦

野津金之助 ㊦

島根県師範中学校々々長

濱 野 虎 吉殿

右指令左ノ如シ

願之趣聴許候事

追而開会之都度事務局へ可届出事

明治十九年五月三十一日

島根県中学校心得 濱 野 虎 吉 ㊦

（明治十九年九月発行同窓学生会雑誌より）

以上のように同窓会による交流が、互いを切磋琢磨することを伝えようとしている。結果としてこの願いは受理され、今の松江北高等学校の同窓会及松会発足につながることになる。この申請の四ヶ月ほど前に倉崎仁一郎は加藤逢吉（大阪府立茨木中学校初代校長）に会い、その二ヶ月後に首席で卒業している。このような文章を書いた十九歳であれば首席であるのも頷ける。加藤逢吉はこの時に倉崎仁一郎の人物を知り、明治二十八年に茨木中学校の校長として赴任した際、真っ先に教師として招聘したのである。茨木中学校では誰の目から見ても倉崎仁一郎は加藤逢吉校長の片腕であった。無くてはならない茨木中

学校の名物教師になったのである。

おわりに

以上の考察から、川端康成と「以文会友」には倉崎仁一郎の生徒葬の関係を指摘できる。倉崎仁一郎は学校で友と信頼関係を構築することの大切さを生徒たちに教え尊敬を集めていた。その文学に対する造詣は深く、上級学校の教員へと招聘されていたこともあったそうだが、それを断って茨木中学校に残ったことも生徒たちは知っていた。断った理由は生徒たちが嘆願書を出したからである。その生徒たちこそ倉崎仁一郎の棺を担いだ茨木中学校十八回生たちであった。また、このような師弟の関係を後の世まで残したいという川端康成の意向で生徒葬の話は数度に渡って書かれたのである。中学校二年生だった川端康成がノーベル賞作家を志したのは、前述のタゴールの影響がある。

インドの詩聖といはれる、ラビンドラナート・タゴールは（中略）「すべての民族は、その民族自身を世界にあらはす義務を持つてゐます。（中略）民族は彼等の中にある最上のものを提出しなければなりません。（中略）美の中に真理を、真理のなかに美を見抜く視覚を発展させて来た」（川端康成「美の存在と発見」昭和四十四年五月）

このタゴールの言う民族の最上のものこそ、生徒葬をしようと決めた生徒たちの心意気だったのである。「師の棺を肩に」を再び小説として発表したのは戦後であるが、日本の良さが失われているタイミングでの発表は、日本的な良さが失われていくことへの危機感が伺える。以上のように川端康成と倉崎仁一郎の関係を見てきたが、もう一つ二人の共通点がある。川端康成が恩師の葬儀にインスピレーションを

得て書いた文章「生徒の肩に柩をのせて」が「団欒」に発表されたのは十九歳である。倉崎仁一郎がその恩師である加藤逢吉と出会ったのも数えの十九歳である。この加藤逢吉は茨木中学校の初代校長で、創立してすぐに教え子だった倉崎仁一郎を招聘している。次に川端康成が「倉木先生の葬式」を小説化したのは二十七歳だったが、倉崎仁一郎が茨木中学校に着任したのも二十七歳である。川端康成が「師の棺を肩に」を再度小説化したのは満四十九歳十一か月（数え五十一歳）だが、倉崎仁一郎が亡くなり、生徒葬が執り行われたのは数えの五十歳である。それぞれ、生涯の恩師に出会った年齢、生涯の仕事を定めた年齢、生涯最上のものを世に示した年齢と考えると、三つの年齢がそれぞれ一致するのである。いずれにせよ、川端康成の文学の出発点に倉崎仁一郎は外せない存在である。これらの考察から、川端康成の「以文会友」の揮毫には、倉崎仁一郎の影響を想定して捉えなおす必要がある。

（茨城大学教育学部国語教育教室 令和二年八月三十一日受理）

注

① ラビンドラナート・タゴール 一八六一年にインドのカルカッタに生まれる。一九一三年にアジア人として初めてのノーベル賞となるノーベル文学賞を受賞した。日本には五回訪れている。

② 西田千太郎 文久二年に松江の雑賀町に生まれる。島根県尋常中学校教頭心得兼務（後に校長心得となる）となり、当時の英語教師が小泉八雲であった。小泉八雲と節子との結婚の媒酌人でもある。三十六歳で結核により病死する。詳細な日記は『西田千太郎日記』（一九七六年六月 島根郷土資料刊

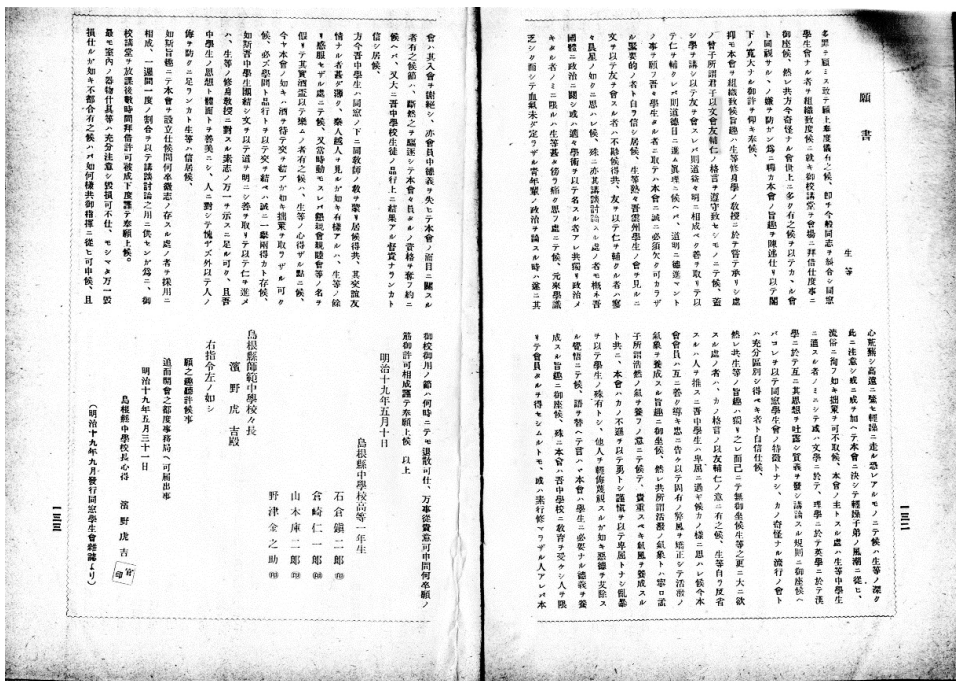
行会」として刊行された。この中の人物の項目の中に「倉崎仁一郎」とあり、「松江中学校の知己」とされる。

③ 伊原青々園 明治三年に松江に生まれる。演劇史の研究に努め、「日本演劇史」「近世日本演劇史」「明治演劇史」を執筆した。

引用文献

- 『川端康成全集』三十七冊（昭和五十五年、新潮社）
水原園博『巨匠の眼 川端康成と東山魁夷』平成二十六年四月 求龍堂
羽鳥徹哉・原善編『川端康成全作品研究事典』平成十年六月勉誠出版
大阪府立茨木高等学校校史編纂委員会 編著『茨木高校百年史』平成七年一月 創立百周年記念事業実行委員会

『新潮日本文学アルバム 川端康成』一九八四年三月 新潮社



願書「鳥根縣師範中学校同窓学生会雑誌」明治十九年九月